

## 認知症カフェにボランティアとして参画体験した看護学生の学び

角谷あゆみ, 宮良 淳子

### 要 旨

認知症カフェにボランティアとして参画体験した学生の学びを明らかにすることを目的とし、看護学生4名にグループインタビューを行った。分析方法は逐語録を作成し意味内容の関連性に着眼し、カテゴリー化した。【認知症カフェの存在意義を実感する】、【地域住民としての自覚が芽生える】、【対象と関係を築く際の自己のあり方に気づく】の3つのカテゴリー、7つのサブカテゴリーが抽出された。参画体験により、認知症カフェが知識や情報を伝える場であり、本人や家族の居場所として重要な役割を担っていると認識し、存在意義について実感したと考える。また自分自身が色々な人に囲まれて生活しており、地域のつながりが安心を生むことを実感し、地域住民としての自覚が芽生えたと推察される。さらに先入観を持たずに対象と関わることや相手に受け入れてもらうため自ら行動することが必要という、対象と関係を築く際の自己のあり方に気づいたと推察される。

キーワード：認知症カフェ, 看護学生, 参画体験, ボランティア, グループインタビュー

### I. 緒言

厚生労働省は認知症施策推進総合戦略（2015 以下、新オレンジプランとする）において、認知症の人が住み慣れた地域の良い環境で自分らしく暮らし続けるために必要としていることに的確に答えていくことを旨とし、7つの柱を掲げた。その4つ目として「認知症の人の介護者への支援」があり、主な政策として「認知症カフェ設置の推進」がある<sup>1)</sup>。認知症カフェは1997年にオランダのアルツハイマーカフェが始まりとされ、日本では2012年頃から普及し<sup>2)</sup>、2013（平成25）年度から国は財政支援を開始した。その役割として、認知症の人やその家族が地域の人や専門家と相互に情報を共有し、お互いを理解し合う場と位置付けられた<sup>3)</sup>。新オレンジプランでは「2018年度からすべての市町村で地域の実情に応じて設置する」という方針が打ち出され、各地で様々な取り組みがなされている。すでに全国各地では看護系あるいは福祉系大学の学生を中心に、学生もしくは大学が主体となって認知症カフェの運営がなされており、その取り組みの実際や学生への影響についての報告がされている<sup>4)~7)</sup>。

A事業所では、2015年から地域の人への認知症の理解を啓発する役割を持った認知症カフェを月に1回開催しており、看護学生が開催に向けての企画・運営にボランティアとして関わった。

先行研究では、学生が関わることによる認知症カフェの参加者への効果の報告はあるが、学生の学びについての報告はみあたらない。そこで本研究では、認知症カフェにおいてボランティアとして企画・運営に関わった看護学生の学びを明らかにすることを目的とする。

### II. 研究方法

#### 1. 用語の定義

##### 1) ボランティア

自発的な意志に基づく各自の余暇時間を活用した活動で、かつ大学の単位認定とは無関係な無償の活動。

##### 2) 参画体験

認知症カフェの開催にあたり、計画段階から主体的に関わり、当日の運営に携わるという体験。

#### 2. 研究対象

認知症カフェにボランティアとして参画体験した看護学生10名のうち、同意の得られたB大学看護学部生4名を研究対象とした。

#### 3. 認知症カフェへの参画体験の概要

A事業所の認知症カフェは、地域の人への認知症の理解を啓発する役割を担っており、①認知症について学ぶ、②認知症を隠さずオープンに語り合う、③認知症について専門職などに気軽に相談できる場を設ける、の3つを目標としている。同カフェに参画した学生の役割として、月1回開催されるカフェの企画の提案や検討、カフェ当日の設営や茶菓の準備や配布、カフェ参加者らの介助や事業の実施といった運営、終了後のミーティング

での意見交換を担った。

#### 4. データ収集方法

認知症カフェにボランティアとして参画した学生を対象に、研究の主旨を口頭と文書で説明し研究対象を募った。同意の得られた研究対象に対し、認知症カフェにボランティアとして参画し学んだことを中心に、グループインタビュー形式を用いた半構成的面接を行い、許可を得て録音した。インタビューはプライバシーの保たれる個室で実施し、インタビュアー1名で行った。インタビュー所要時間は90分、実施時期は2017年11月である。

#### 5. 分析方法

発言内容はバレルソンの内容分析手法を用い、質的に分析した。録音された発言内容を文脈単位、1内容を1項目として含むセンテンスを1コードとし、個々のコードを意味内容の類似性に基づきグループ化しサブカテゴリーとした。さらに、サブカテゴリーの類似性に沿ってグループ化し、カテゴリーとして名称をつけた。信頼性・妥当性を確保するために、発言内容の抽出とカテゴリー化は4名の研究者間の合意が得られるまで検討を繰り返し行い、修正を重ねて確定した。

#### 6. 倫理的配慮

対象機関の倫理審査委員会の承認（承認番号17-5）を得て実施した。対象者に対し、文書及び口頭で研究の目的、インタビューの内容と方法、ICレコーダーによる録音、プライバシー及び個人情報の保護、研究結果の公表方法、研究への任意参加と拒否権について説明し同意を得た。

### Ⅲ. 研究結果

#### 1. 対象の属性

グループインタビューに応じた学生は4名で、いずれも22歳の女性、インタビュー時は4年次生であった。企画から開催までの4回（月1回開催）すべてに参加した学生は3名であり、1名は初回のみ不参加であった。平均参加回数は3.75回であった。

#### 2. 発言内容から導かれた結果

グループインタビューで得られた発言内容（コード）から7つのサブカテゴリーが抽出され、3つのカテゴリーで構成された。以下サブカテゴリーは〈 〉、カテゴリーは【 】、コードは「 」で表す。（表1）

表1 認知症カフェに参画体験した看護学生が得た学び

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
認知症カフェの存在意義を実感する	認知症に関する知識や情報を伝える場としての存在	認知症に関する正しい情報を参加者に伝えている
		認知症が心配になった時の相談窓口を伝えている
		参加者は認知症について理解できたと話している
		（正しい情報を伝えることで）「認知症の人」という偏見が小さくなっている
	認知症の方や家族の居場所としての存在	認知症の方やその家族は参加者に優しくされている
		認知症の人もその家族もリラックスして過ごしている
		ご家族が、ここ（認知症カフェ）に来ると安心すると話している
		認知症の方が、病気に対する思いや生活の中での体調の変化を話すことができる
	見知らぬ人同志をつなぐ場としての存在	初めて会った人同士でも、会話のなかで共通の話題をみつけ、話が盛り上がっている
		何気ない話をきっかけに、その人と話が進展して行って、つながっている
地域住民の人と話していると、その人との距離がどんどん近くなる		
参加者同士で連絡先を交換しており、新たな関係を築こうとしている		
地域住民としての自覚が芽生える	色々な人に囲まれて生活をしている	地域には銀行の人や警察官など、いろいろな職業の人が生活している
		病気の人やその家族以外にもいろいろな人が地域で生活している
		地域には赤ちゃんからお年寄りまで生活している
	地域のつながりが安心を生む	近所の人と挨拶を交わすことは、困ったときに支え合う基盤となる
		様々な年齢の人が支え合うことで安心して暮らしやすい地域になる
		看護学生としての私は地域で生活している私でもあり、地域住民の役に立てることがある
対象と関係を築く際の自己のあり方に気づく	先入観や偏見を持たずに関わる	（認知症をもつ人ではなく）地域で暮らす人と思って関わると、健康な部分が見えてくる
		「認知症の人」ではなく、その人の一部に認知症があると、関わる中で感じた
		偏見を持たずにその人らしさを大切に関わることが重要だと思った
		その人の生きてきた歴史も尊重して、その人を知りたいと思う姿勢が大事だと思った
	相手に受け入れてもらうために自ら行動する	自分が自然体でいることで、相手も話そうと思ってくれと感じた
		信頼関係を築くためにコミュニケーションも大事だが、自分から一歩踏み出すことが大切
		目上の人に対する言葉遣いを気をつけることは、相手に受け入れてもらうために最低限必要なこと
		役割はあるが、自分で考えて選択し、行動しないとイケない

### 1) 【認知症カフェの存在意義を実感する】

このカテゴリーは〈認知症に関する知識や情報を伝える場としての存在〉、〈認知症の方や家族の居場所としての存在〉、〈見知らぬ人同志をつなぐ場としての存在〉の3つのサブカテゴリーから構成された。

参加したカフェでは、「認知症に関する正しい情報を参加者に伝えている」、「認知症が心配になった時の相談窓口を伝えている」といった情報の伝達の場であり、「参加者は認知症について理解できたと話している」、「(正しい情報を伝えることで)「認知症の人」という偏見が小さくなっている」と感じており、〈認知症に関する知識や情報を伝える場としての存在〉とネーミングした。

また「認知症の方やその家族は参加者に優しくされている」、「認知症の人もその家族もリラックスして過ごしている」、「ご家族が、ここ(認知症カフェ)に来ると安心すると話している」とあるように、当事者や家族がリラックスして安心して過ごせる場であると認識しており、〈認知症の方や家族の居場所としての存在〉とネーミングした。

それに加え「初めて会った人同士でも、会話のなかで共通の話題を見つけ、話が盛り上がっている」、「何気ない話をきっかけに、その人と話が発展していき、つながっている」ということから、〈見知らぬ人同志をつなぐ場としての存在〉とネーミングした。

以上のことから認知症カフェは〈認知症に関する知識や情報を伝える場としての存在〉であるだけでなく、〈認知症の方や家族の居場所としての存在〉であり、〈見知らぬ人同志をつなぐ場としての存在〉でもあるという【認知症カフェの存在意義を実感する】機会となっていた。

### 2) 【地域住民としての自覚が芽生える】

このカテゴリーは〈色々な人に囲まれて生活をしている〉、〈地域のつながりが安心を生む〉、の2つのサブカテゴリーから構成された。

「地域には銀行の人や警察官など、いろいろな職業の人が生活している」、「病気の人やその家族以外にもいろいろな人が地域で生活している」と感じていることから、〈色々な人に囲まれて生活をしている〉とネーミングした。

また「近所の人と挨拶を交わすことは、困ったときに支え合う基盤となる」、「様々な年齢の人が支え合うことで安心して暮らしやすい地域になる」、「看護学生としての私は地域で生活している私でもあり、地域住民の役に立てることがある」と認識しており、〈地域のつながりが安心を生む〉とネーミングした。

以上のことから、学生自身も〈色々な人に囲まれて生活をしている〉ことを改めて感じ、〈地域のつながりが安心を生む〉といった気づきがあり、【地域住民としての自覚が芽生える】ことにつながっていた。

### 3) 【対象と関係を築く際の自己のあり方に気づく】

このカテゴリーは〈先入観や偏見を持たずに関わる〉、〈相手に受け入れてもらうために自ら行動する〉の2つのサブカテゴリーから構成された。

当事者の方やその家族と関わる機会を通し、「(認知症をもつ人ではなく)地域で暮らす人と思って関わり、健康な部分が見えてくる」、「『認知症の人』ではなく、その人の一部に認知症があると、関わりの中で感じた」から、〈先入観や偏見を持たずに関わる〉とネーミングした。

また参加者との関係を築くにあたり、「自分が自然体でいることで、相手も話そうと思ってくれると感じた」、「信頼関係を築くためにコミュニケーションも大事だが、自分から一歩踏み出すことが大切」ということから、〈相手に受け入れてもらうために自ら行動する〉とネーミングした。

以上のことから〈先入観や偏見を持たずに関わる〉ことが重要であり、〈相手に受け入れてもらうために自ら行動する〉といった【対象と関係を築く際の自己のあり方に気づく】機会となっていた。

## IV. 考察

### 1. 認知症カフェの存在意義を実感する

今回の活動を通して、学生は認知症カフェが認知症に関する知識や情報の伝達の場であるとともに、認知症の当事者や家族に安心感を与える場であり、地域で生活する住民同士を結びつける場であると捉えていた。認知症カフェに参加することにより、机上で学んだ知識が経験と重なり豊かな学習資源となったことが推察された。学生自らが企画し運営に関わることは学習への動機づけとなり、認知症カフェの存在意義についての理解を、よりいっそう深めることになったと考える。

認知症カフェに参加した社会福祉学専攻の学生も、本研究と同様に、認知症カフェの社会的存在意義として「地域の人々の社交の場」、「ニーズを抱えている人(認知症当事者や介護家族)と社会資源(制度・サービス)を結ぶ場」という学びを得た<sup>7)</sup>との報告がある。実際に参加することにより、認知症カフェが認知症の人の家族に対する支援の一つであり(中略)、認知症の人は楽しめる場として、家族はわかり合える人と出会う場として、また専門職や地域住民は交流の場としての効果があ

る<sup>8)</sup>ことを、知識としてだけでなく実感する機会となっていると考える。認知症カフェの効果を理解することにより、今後は自身が看護専門職として担うべき役割について考え、行動に繋がることを期待したい。

## 2. 地域住民としての自覚が芽生える

学生は、認知症カフェの参画に携わる様々な人との交流を通し、地域での生活は多くの人々に囲まれ支え合うことで成り立っていることを認識していた。また地域の人々のつながりが社会資源であることを実感として捉えており、自身も地域住民の一人であるという自覚が芽生えていた。認知症カフェの運営を通して地域の人と対等な関係性で触れ合うことにより、学生に地域住民としての意識が芽生え、率先して取り組む姿勢につながったと推察された。

在宅ケアシステムを構成する要素として重要な社会資源は、生活上の諸欲求の充足や問題解決を目的として利用できる各種の物的・人的諸要素を総称したものの<sup>9)</sup>である。

社会資源の開発のためには、地域住民ひとりひとりがそこで生活する住民の生活に目を向け、生活上の課題を見出し、解決に向けてそれぞれが持つ力を結集する必要がある。過疎化の進展や地域社会の連帯感の希薄化などが指摘される中で、地域社会のつながりの再生を促すことは重要な課題である。今回、学生自身が地域住民の社会的資源のひとつであるという自覚を持つ機会になっており、今後の社会資源開発に向けて活躍するための第一歩になるのではないかと考える。

## 3. 対象と関係を築く際の自己のあり方に気づく

学生は、看護学実習等において認知症の人と関わった経験があり、認知症の人との関わりに戸惑いや不安が少なかったと思われた。認知症カフェで一人ひとりの方とじっくりと関わることにより、その人の健康な部分が見え、その人の一部として認知症があると感じ、先入観や偏見を持たずにかかわることの重要性を実感していた。また長谷川<sup>10)</sup>が、認知症カフェへの参加によって参加学生自身にも自らの姿勢を見直す効果的な機会となると述べているように、学生らは自分が自然体でいることや自ら一歩を踏み出すことにより、相手に受け入れてもらう経験につながり、対象と関係を気付く際の自己のあり方を見直す機会となっていた。

認知症の人への接し方として有効性の高い考え方の「ユマニチュード」では、「見つめる」「話しかける」「触れる」「立つ」の4つを、ケアされる側とケアする側がお互いにひとりの人間として向き合うための基本的な技として身につけることを提唱している。学生は、他の

参加者らがその場の状況に見合うかたちで臨機応変かつ柔軟にかかわる姿をモデルとしながら、認知症の人と信頼関係を築いていく姿勢を学んだと思われる。

認知症カフェのスタッフとして参画体験のある福祉系学生が体験から感じたことのひとつとして、学生らは専門職とともに当事者と関わる中で、専門職の持つ技能の高さに気づき、職業モデルを発見していたことが示唆されており<sup>11)</sup>、本研究の研究対象においても同様に、今後、看護専門職としての自らの目指すべき姿勢を見出したと推察する。

## V. 結語

今回の体験は、認知症カフェの存在意義を実感する機会となり、地域住民としての自覚が芽生えたことで、より良い地域を作るための社会資源や支援の在り様について考える機会となった。また、ありのままのその人を受け入れ、自己開示も必要であるという、対象と関係を築く際の自己のあり方についても考える機会となった。

本研究の研究対象は認知症カフェの運営に一定の役割と責任をもって参画しており、それまでの受動的な学習とは異なり、能動的な学びにつながったと考える。今回の経験が専門職としての姿勢に影響し、それが周囲に共有されていくことに加え、専門職として地域包括ケアシステムの構築に寄与する人材となることを期待したい。

## VI. 研究の限界

本研究は4名のインタビュー内容をデータとしており、データの偏りや不足は否めない。また1ヶ所の事業所で行われた取り組みへの参加を対象としていることから、結果を一般化するには限界がある。今後はさらに対象施設や対象者を増やし、検討を重ねる必要がある。

## 【文献】

- 1) 厚生労働省:認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン), 2019.8.31,  
<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000064084.html>
- 2) 朝日新聞社:認知症カフェ,朝日新聞朝刊(2017-11-21)掲載, 2019.8.31,  
<https://www.asahi.com/topics/word/%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E5%8C%85%E6%8B%A C%E6%94%AF%E6%8F%B4%E3%82%BB%E3%83%B3%E3%82%BF%E3%83%BC.html>
- 3) 厚生労働省:認知症カフェ実施状況, 2019.8.31

<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/0000116743>

- 4) 長谷川真美, 佐藤光栄, 柿沼直美, 他: 看護大学で行う認知症カフェの成果と課題—学生参加と大学の社会貢献の視点から—, 東都医療大学紀要, 6 (1), 49-56, 2016.
- 5) 角マリ子, 多久島寛孝: 認知症カフェおよびサロンにおける認知症とその家族支援についての文献的考察, 熊本保健科学大学研究誌, 15, 109-120, 2017.
- 6) 藤井宏明, 伊藤泰三, 中司登志美: 認知症カフェへの参画体験が福祉系学生に及ぼす影響に関する研究, 介護福祉教育, 22 (2), 124-132, 2017.
- 7) 中嶋裕子: 大学で実施する認知症カフェにおける学生たちの学び—平大認知症カフェ (みゆきよりみちかふえ) における取り組み—, 社会事業研究, 57, 170-179, 2018.
- 8) 臺由香, 石田千絵, 山下留理子編: 在宅看護論—地域療養を支えるケア—, 第5版, 249, メディカ出版, 大阪, 2017.
- 9) 内藪耕二, 小坂樹監: 看護学大辞典, 第5版, 752, メヂカルフレンド社, 東京, 2002.
- 10) 長谷川真美, 佐藤光栄, 柿沼直美, 他: 看護大学で行う認知症カフェの成果と課題—学生参加と大学の社会貢献の視点から—, 東都医療大学紀要, 6 (1), 49-56, 2016.
- 11) 藤井宏明, 伊藤泰三, 中司登志美: 認知症カフェへの参画体験が福祉系学生に及ぼす影響に関する研究, 介護福祉教育, 22 (2), 124-132, 2017.